毎月1回20日発行　（昭和31年3月28日第三種郵便物認可）

山と博物館

編集責任者　大町山岳博物館

レルヒ少佐に送られたスキー戯画

明治44年1月高田に着任したオーストリア参謀レルヒ少佐はスキーを靴に結び着けることから、その指導に当った。スキーの普及はめざましく、スキー応用演習が行われ、民間では通勤に、郵便集配に、林業にそれぞれ実用化された。こゝに何千年来雪にしいたげられ冬期間ロバタを囲んでいた人間が、雪を征服する時代が来たのである。写真は彼の故国の友人から寄せられた絵はがきである。表に寄書きで「心からシイ・ハイルを送る」とある。

NO. 14　1957年2月20日　大町山岳博物館後援会 発行

将校婦人のスキー練習ぶり、高田師団のスキー研究は組織的、計画的であつて、新潟県下の各学校の先生、各聯隊の将校を手はじめに、あらゆる階層の人々に講習会等、普及発達に努めた――スキーは豪雪地方の交通体育にかくことができないとして。当時の服装などおもしろい情景が見られる

写真上 急斜面にそう滑降、わが国スキーの初期は一本杖が特徴、大正2年両杖を採用

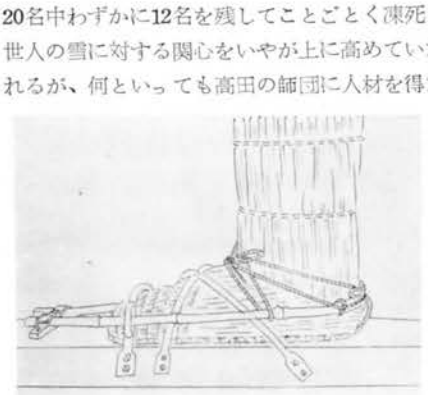
写真左 オーストリア参謀レルヒ少佐、明治44年高田着任、スキー普及の基礎を固めた

スキーの発達をみる

わが国とヨーロッパに

明治という時代は、われわれの父や祖父や或は曾祖父の世代が良かれ悪かれ近代化を急いでけん命に努力した時代である。欧米の六倍も七倍もの努力をしなければ先進国に追いつけないと自らをいましめ、はげました興隆の時期である。「文明開化」がその標語であった。しかしながら、この「文明開化」もスキーの輸入を忘れるかに見えた。明治の40年になってもスキーはわが国民には知られていない。ところが、まさに明治も終ろうという44年に、スキーは一挙にしかもがっちりと根をおろすことになった。

43年12月 スエーデンから杉村虎公使を経てスキーとその手引書が陸軍省に届き、同省は更にこれを高田の十三師団に送ってその研究を命じた。これ以前にもスキーはわが国に入ってはいるがいづれも単なる物好き、珍らしいもの、親しみのないものとして直ぐに忘れられ、或はそのむづかしさにへこたれて、根をおろすに到らなかった。新しいものを取り入れ自分のものにするには何時の世にも困難が伴うものなのだ。が、高田の師団はこの難事をやってのけた。世界各国の近代スキー発達史を比べると、わが国のそれは、組織的計画的かつ徹底的な点で著しい特色を示し急速調の点でも他に類例がない。それは「文明開化」しなければという強い意識が熟していたこと、青森の歩兵聯隊が八甲田の雪中行軍中猛吹雪に襲われ、220名中わずかに12名を残してことごとく凍死という空前の悲惨事が世人の雪に対する関心をいやが上に高めていたこと、などが考えられるが、何といっても高田の師団に人材を得たことが与って大きな力となっている。「手引書片手に営庭の築山で七転八倒したが要領を得なかった」というからわれわれの想像も及ばない苦労をしたわけだ。が、**44年1月**にオーストリアの参謀少佐テオドール・フオン・レルヒが着任し万事は氷解し急速調で訓練に民間人の講習に成果をあげはじめた。レルヒ少佐は山岳スキーの始祖ツダールスキイの弟子であった。時と所とそして人を得たことはこのことであろう。同師団では最初から軍事的価値は別として、というよりも、これを捨てて「雪国の文明開発」、国民の体育に、つまり雪国の交通とスポーツに主要目標をおいている。明治の標語「文明開化」は空題目ではなかったのだ。その意識は識者のうちに漲っていたのである。



山口式スキー スッペンジヨ用のもので民間に普及をはかる趣旨で考案されたもの。

スキーというたった「二枚の細長い板」を足につけて、フリチョウ・ナンセンはグリーンランドを横断し、この探検記を書いた。これがひろく読まれ、ヨーロッパの知識人はスキーの存在とそのすぐれた効用を知った。それまでは寒い北欧の下駄位にしか考えていなかった。いやその存在さえも中央ヨーロッパには知られていなかったのである。スキーは近代的脚光を浴びた。この意味でナンセン博士の壮挙は銘記されてよい。近代スキーの誕生、若くはスキーの近代的再生復活だ。この時期がまた丁度近代オリムピアの発足と同じであることは、人々の心にこれをとり入れる用意が、いや機運が熟していたことを物語るものであろう。

スキーは実用として雪の上の交通の具であり、実用を離れた遊び（プレイ）の道具である。すなわち「目的のための手段」でありま

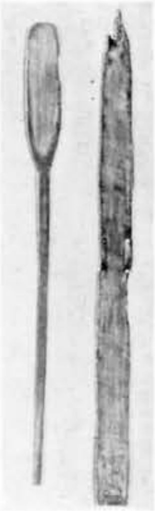
た「自己目的」的なものである。例えば南極で使う場合は前者であり、今日多くの人々の行っているのは後者である。後者をわれわれはSportと呼んでいるこのようなスキーの記録を拾ってみよう。

吹雪をついてグリーンランドを横断するナンセン一行、ナンセンはノルウエー探検家

1911年1月　39才のアムンゼンは南極に到達した。彼はスキーをはいて99日間は1875哩（約3000K）を走破し途中4000米位の山を越えた。同時に同じ目標を目指した英国のスコット隊がモーター橇（そり）に頼って失敗したのと著しい対照を示している。**1934年11月**　ロシヤの軍人は極東のネルチンスクを出発し翌35年の2月にモスコーに着いた。彼らは約四ケ月に4500哩（7200K）を歩いたことになる。これは長さの記録である。**1931年**　英国のカメツト（ヒマラヤ）遠征隊員ホルズワアースは7160mという高所から一気にベースキヤムプまで滑り降りた。歩いた本隊は数日を要したという。これは高いところを滑ったという記録といってよかろう。普通**長距離競走**というと18K、耐久が50Kときまっているが、ノルウエーでは90Kレースが数十年来大きな行事として行われている。イタリイのオリムピツク選手ツエノ・コロはスイスの特別につくったコース（キロメーター・ランセ）で159K（時速）を上廻るスピードを記録した。速さのレコードである。**ジヤムプ**ではドイツのオーベルスドルフで135mという大飛躍いや大飛行に成功した。また第2次世界大戦中無敵を誇るソ連の機械化部隊がフインランドとの国境の密林で僅か数名一隊のフインランドのスキー兵に襲われ一師団全滅という苦盃をなめた。雪の中ではスキーの方が強いのだソ連がスキーに力を入れ出したのはこのこと以来だといわれる。これもスキー記録の一つに数え上げてよかろう。

ナンセンは近代スキーの復活に大きな役割を演じたが、また古代スキーの科学的研究に手を染めたのも彼である。北欧の考古学者や民族学者は、沼や池中から、発見される無言の古代スキーやフイヨルドの岩壁に石器で刻まれた彫刻を手がかりにスキーの過去を探りまたアジア、ヨーロツパ大陸の反境の民の用いている古来のスキーやその伝承を求めて、スキーのシユプールを明らかにすることにより民族移動の足跡を知ろうと「スキー学」という新しい分野を確立した。北欧の王者の伝記にはスキーの記事が見られ、スキーは当時武芸の重要な一部門であったことを物語っている。『山を旋風のようにこちらへとんで来るのは一体何者だ。スキーをはいた男かな王は猜った。やがてその旋風は勢よく近づいてハラルド王の前に現われ、礼をした。王はよろこんでこれを受けた。有能な戦士に相違あるまいと思ったからである………』このモダーンな文字は実は4年以上も前の北欧の王者列伝からとった一コマである。スキーは人類と共に古くそして常に新しい。

北欧の神話にでてくるスキーの神、ウル(Ull)


オールのような杖とスキー　石器時代紀元前二〇〇〇年頃（今より約四〇〇〇年前）のもの。スエーデンバートレスで発見された。（本館所蔵古代スキー模型）

しかしわが国もこの古代スキーに全く無縁だとは言い切れない樺太には毛皮をはりつけた短いスキーがあり、また朝鮮には現代のスキーと同類のスキーが古来用いられていた。支那の辺境の民にも用いられたことは史記その他の文献に見られる。わが国の輪かんじき（スカリ）も頭から無縁だとは言えないかも知れない。　（福岡孝行）

ローマ法王イノセンス三世の頃、ノールウエイのスブエレソン王は冬をトロントハイムで過し春は南岸に沿って東進し大勢の忠臣を得た。帰路彼はサルプスボルグに止まってインガと言う乙女を見染めた。然し長くこの地におれず再会を約して北上しベルゲンで「ユルの祭」を迎え饗宴を催したが病いで短い一生を終った。インガは次の夏男子を生んだ。聖教に従えば、この男子が王位継承者なのだが反対党はこの王子を憎み捕えようとした。これを察知したビルケバイナーは王子と母を守る決意をしスキーで逃れた。後王子は13才でハーコンソン王となった。

ノルウエー北部より発見された石器時代のスキーヤー？の像、紀元前2,500年と推定されている。手にもつているのは杖かそれとも石斧か？頭の角か耳はカムフラージか？

ミノを着てワカンジキを踏んでいる図

穴釣りの魅力

○…仁科三湖の中央にある中綱湖は極めて小湖であるが、冬季はスキーヤーや地元の穴釣りの人々で賑わう
○…氷結は十二月下旬、釣れ時は融氷期の三月頃、休日には二、三〇人の釣天狗が訪れる。
○…釣穴は直径三〇〜五〇糎、フナ、ワカサギ等一日に二貫メも釣れるといわれる。

山岳会 神戸ツキワ登山会

＝神戸市長田区西代＝

昭和27年5月再建。昭和4年5月設立したが戦災のため昭和20年8月解散、終戦後いち早く発足しようと旧会員に檄をとばした、新会員には家庭の幸福は健康にあり、健康は登山にありと会員200名で発足、現在、会員の親睦を計る方法として名勝旧跡を歩き、毎月一回の茶話会同じく近山の登頂、年一回の遠征登山など会員の活躍は目ざましい。

バッヂは設立当時のものを踏襲し五百回章、千回章、千五百回章で五百回を増すごとに一輪づつ輪を増す。

【動物園だより】 フクロウ

フクロウはだれでも知っている代表的な留鳥で、昼間は杉、檜等の梢に止り樹葉に隠れて睡っていて、夜、羽音のしないことを活用してネズミなど捕食しています。

3—5月頃1巣2—4個の純白色の球形卵を生み27—29日目にふ化します。ヒナは白色の綿毛につつまれ大変愛嬌のある姿をしています夜ホホ、ゴロッホ、ホー、ホーとなきまた、ギャー、ギャーと赤ん坊のなき声のような声をたてることもあります。昔から昼間は目が見えないと言われていますが、夜でも昼でもよく見えます。

博物館後援会員募集

拡大された建物と北アルプス展望に絶佳の位置を占め、しかも自然環境にめぐまれた大町山岳博物館は、本邦唯一の施設として、本年度は新たにその内容の充実が重点的に行われます。昨年発足した後援会も更に発展した「全国山岳愛好者の集い」として「山の博物館」を育成していきたいと念願しております。

趣旨に御賛同下され、御入会いただければ甚幸に存じます。

期日 2月1日〜3月10日 申込先 長野県大町市大町山岳博物館（入会申込審規約本館にあり、8円切手同封の上御申込み下さい）

大映日本アルプス撮影隊による總天然色長編記録映画「白い山脈」はようやく完成しました。この映画は昨年2月以来、本館の指導の下に北アの動植物の生態を追って苦難の撮影を続けて来たものです大映が18日皇太子殿下を招いて産経ホールで開催した試写会では観覧者の絶賛を博し、更に文部省特選に入り、一般封切を26日に控えて大きな期待が寄せられています。大町では市公民館主催により3月6日から6日間上映されます

【博物館だより】

2月1日居谷里自記雨量計点検 **3日**居谷里セン類採集 **14日** 博物館の沿革資料作製 **18・19日**居谷里鳥類24時間観察 **18日**映画〝白い山脈〟大町市主催で上映することに決定 **22・23日**カモ24時間観察

（今月の寄贈） マガモ1体大町市五日町北沢久五一 ノリス1体大町市木崎仲田輝雄 三紀層化石15点広津村堀越中沢清寿 リス1体大町市八日町勝野義文・師岡えい アカエリカイツブリ1体松川村高橋三七登 カイバト1体大町市五日町甕弘夫 （敬称略）

編集後記 春を告げるネコヤナギ、フキの塔の見られる季節となりました。シーズンオフになろうとする頃、本号ではスキーの總まとめとでも云いましょうか、古きスキーを尋ねてみました。私たちがスポーツに楽しむスキーがいかに古くから、そしてその研究が重要な学問の位置を占めることを、今さらながら知って驚きました。御多忙の処御寄稿下さった福岡孝行氏に感謝致す次第であります。

おしらせ 本紙の購読を御希望の方には実費 1部10円でおわけします。但し遠方の方は郵送料の実費をいただきます 大町山岳博物館後援会

山と博物館 No.14 1957.2.20発行
編集発行人 大町山岳博物館
発行所 大町山岳博物館後援会
長野県大町市神栄町電話211番
印刷所 信州印刷株式会社